



図 私の経験と同じ左こめかみ部の膨疹

bがaの1週後の状態で、同じ場所に膨疹が生じている。同部位も、消えるときには跡形もなく消える。

皮膚疾患の記憶

渡辺 玲

大阪大学大学院医学系研究科皮膚科・アレルギー免疫疾患統合医療学

同じ場所に繰り返し出てくる皮膚疾患，と書くと，乾癬，固定薬疹あたりが真っ先に思い浮かぶのが通常であろうが，私が最初に同じ場所に出る皮膚疾患として認識したのは慢性蕁麻疹である。

慢性蕁麻疹もちの私は，皮疹が出始めた10歳の冬に，左前腕と左こめかみの同じ場所に小さな赤い斑点が戻ってくることに気づいた。もちろん膨疹の多くが場所，形を変え出没していたが，少なくともこの2カ所は，いつも同じ場所にあるような気がしたので「ほんとにまた同じ場所に出てくるかな?」と思いボールペンで輪郭をなぞった。結果，なぞった線に皮膚描記が生じ，わけがわからなくなってしまう記憶がほんのりとある。この同じ場所に出てくる皮疹のことは当時の私の興味対象からすぐに追い出され，ふと思い出した11歳の夏には，少なくともこの場所には毎日出なくなっていた。

skin-resident mast cellは月単位で生存するそうであり，皮膚科医になってから少し腑に落ちた。あ

の場所にいたmast cellは怒りっぽかったのかもしれない。

皮膚免疫細胞の勉強を始め，体中を絶えず循環していると漠然と思い込んでいた免疫細胞の一定数が，皮膚に住み込んで動かないらしい，と理解するようになった。皮膚構造の一部と理解されていた細胞も皮膚免疫の一端を担うことが知られている。

皮膚疾患が全身の変調の表れであると同時に，皮膚局所にimprintされた情報も，疾患の持続や再燃には重要な意味をもつ。「皮膚は一度病気ができたことを覚えているから同じ場所がひどくなりやすいんですよ。ぶり返さないようにするには，表面がきれいになった後のメンテナンスが大切です」。そんなふうに患者さんに説明すると，納得されることが多い。

患者さんは自分の皮膚を毎日みているわけで，子どものころの私と同じような疑問をおもひの場合も少なくない。患者さんから納得の声をいただくと，仲間ができたような嬉しさを覚える。